

二人の作家の秘密のないスフィンクス

川口淑子

序

オスカー・ワイルドとヘンリー・ジェームズは、ほぼ同時代にロンドンで活躍した作家だが、二人の間にあったものは、交友関係というよりは敵対関係に近いだろう。性格が対照的な二人は、お互いに相手に対して好ましくない評価を口にしているが、ライバル関係以外にも二人には接点がある。ジョナサン・フリードマンは、この二人の作家は互いの作品の台詞を形を変えて取り込んでいると指摘し (Freedman 167)、特に 90 年代のジェームズの作品にはワイルドの影響が色濃く出ていると考える。確かに、二人の作家の作品には、プロットや登場人物の類似が見当たるが、それ以上に、根本的な方向性の類似には注目すべき点がある。

ワイルドのアイランド人としてのアイデンティティはよく検討されるのに対し、ジェームズのアイランド性は、まず取り上げられることはない。しかし、アイランドの移民の先祖を持つジェームズは、自分をアイランド系として自覚していなかったとしても、ジェームズ家の人々は話すことや書くことを非常に得意としており、彼が言葉に溢れた家系の出であることは特徴的である。さらに、ジェームズのゴースト・ストーリーや不思議な話には人を驚かせるような想像力が感じられ、作家の饒舌なスタイルも話が尽きることがないアイリッシュの豊かさを思わせるところがある。そして、二人の作家の作品には漠然とした気質や表面的な表現の類似を超えた共通点がある。

ワイルドは「嘘の衰退」(“The Decay of Lying”, 1889) で明言しているように、言葉が直接的に何かを指す機能以外のものを常に重視してきた。物語がかもし出す余韻や謎を讃えたワイルドの作品を一つ挙げると、「秘密のないスフィンクス」(“The Sphinx Without a Secret”, 1887) がある。そして、ある種のライバル関係にあったヘンリー・ジェームズにも、この作品を思わせる短編小説がある。「友達の友達」(“The Friends of Friends”, 1896) と名づけられたこの作品は、一見したところジェームズが多く描いたゴースト・ストーリーの一つだが、謎が消えることで失われるもの、変わってしまうも

6 川口淑子

のを描いているという特徴がある。「秘密のないスフィンクス」では、謎めいたレディー・アルロイは、自分の正体が解明されると、それに耐えられないかのように死んでしまう。他方「友達の友達」では、正体を明かすことと死ぬことは分かちがたく関係しているように見える。ただし、この二人の物語では、問題の人物の死後、謎が消滅したと思われる時になって、二人にまつわる謎は手に負えないほど大きくなっていることも見逃しがたい。本論では、ワイルドとジェイムズが描いた作品中の「謎」の性質を再検討する。

1. 秘密と女性性とフィクション性

ワイルドは謎めいて魅惑的な女性を多く描いているが、ジェイムズも謎めいた女性を何人も描いている。関係者の人生を意図しないうちに狂わせてしまう『鳩の翼』(*The Wings of the Dove*, 1902)の裕福なミリー・シールはファム・ファタール的であるし、資産を持たない地味な女性にさえ、謎めいた雰囲気がつわりついていることが少なくない。例えば、ミリセント・ベルは、「密林の獣」(“*The Beast in the Jungle*”, 1903)のメイ・バートラムが、作品中で「スフィンクス的」(sphinx-like)と呼ばれ、彼女についての説明が最後の場面まで抑えられていることに目を向けている (Bell 270)。

「秘密のないスフィンクス」のレディー・アルロイや「友達の友達」の貴婦人は、秘密を剥ぎ取られることで消滅してしまうか、死際でない限り秘密を明かすことができない。この展開は、他者や対象を理解しようとする際に、強い光を当てて対象が消滅するまで分析することの無意味さを語る。そして、二人は、いなくなった後で、関わった人に忘れがたい印象を残しているのも事実である。ここには、物語を取り巻く魅惑的な雰囲気、あるいはフィクション性は、突然消されることによってのみ不可解なものとして後に残るという皮肉がある。ミリー・シールは、死ぬことによって神々しいまでのイメージをまとうことになるが、ジェイムズの作品の死を細かく分析したアンドリュー・カッティングは、ミリーの死は直接その場面を描かないことにより、作品中に拡散していると捉える (Cutting 82)。カッティングの指摘は死に焦点を絞ったものだが、死に至らずとも、完全には理解できない神秘は作品全体に広がっていく性質を持つ。この広がりや、漠然と人間の不可解さを表現するものであると同時に、一つの独立した作品が一人の人間の個性のように放つフィクション性も感じさせるものである。

「秘密のないスフィンクス」でも「友達の友達」でも、ファム・ファタールの二人の女性は、女性の神秘性を示しているだけではなく、物語をとりまく、見えない要素であるフィクション性を示している。二つの作品の女性達の謎は、物語のストーリーには完全に回収できない根本的な謎と言ってもよいものだろう。ワイルドとジェームズの描く謎は、このような広がりを感じさせるものである。ワイルドの「秘密のないスフィンクス」では、次のレディー・アルロイの顔立ちを描写する場面では、謎と美が関連したものであることが語り手によって告げられる。

It seemed to me the face of some one who had a secret, but whether that secret was good or evil I could not say. Its beauty was a beauty moulded out of many mysteries—the beauty, in fact, which is psychological, not plastic and the faint smile that just played across the lips was far too subtle to be really sweet. (*The Complete Oscar Wilde* 209-10)

謎を残すこと、あるいは作品中であえて書き残しの部分を作る描き方は、美的な余韻を生み出している。これは日本人には馴染みの余白の美意識も思わせるが、この余白は、庭が自分の家と他人の土地の間の緩衝地となるように、作品と作品の外の世界を繋ぐ役割も果たすだろう。エドガー・アラン・ポーが、秘密が解明されないことの重要性を見抜いていたことは知られているが、作品中の謎は、作品の完成度を高めるだけでなく、作品を外の世界へと繋ぎもする。作品中の謎は、作品の外の現実世界は実は謎めいているのに、普段それに気づいていないことを思わせるとも言える。

そして、秘密は、物語のふくよかさを生み出すだけでなく、個人の理想的生活とも密接に関わっている。レディー・アルロイやメイ・バートラムのような不可思議な女性は、女性の神秘やフィクション性の比喩としてあるだけでなく、一度はこのような大きなものを匂わせながらも、結局のところ、二人は個人の生活を重視する必要性という小さな場所に戻ってくる。二人の女性に共通するのは、個人的生活を重視する態度であり、ここから謎が生じている。ワイルドとジェームズが謎めいた人物を描きながら示しているのは、個人の生活の中に潜む美意識であるとも言えるだろう。

2. 境界線とズレ

人や物を取り巻く神秘を考えるなら、ジェイムズの作品には、自分好みの世界を作り出し、それを外の世界から遮断することで守ろうとする人物が何人もいる。例えば、自分と半ば同化した骨董品のコレクションで自分だけの領域を作る「ポントンの収集品」(“The Spoils of Poynton”, 1896)のゲレス夫人や自分のアルターエゴの住む家に執着する「楽しき場所」(“The Jolly Corner”, 1908)のブライドンがある。ゲレス夫人について考えると、見事に骨董品をディスプレイする彼女の家は美術館のようだが、そこには明らかに彼女の個性とコレクションされた物が融合した独特の地場のようなものがある。そして最後にゲレス夫人のもとを離れた骨董品が全て炎上してしまうのは、芸術家と芸術が切り離せないことともに、本体と余韻の分断は全体を損ねてしまうことを示しているようにも見える。

ゲレス夫人は、職業的には芸術家ではないことに注目しておきたい。彼女はワイルドの理想に重なるように、自分の生活そのものの芸術化を図っているとも言える。もしジェイムズの作品の中で最もワイルド的な人物を挙げるなら、歯切れのよいウィットと才能を持ったゲレス夫人を挙げるができるだろう。彼女はジェイムズとワイルドの接点を感じさせる人物である。

ジェイムズが描いた女性の中で最も神秘的と思われるのはミリー・シールだが、バージニア・スミスはこの性質を意識して、『鳩の翼』を避難場所を見つけ、自由を求め、ひどい現実挑む物語と位置づけている (Smith 177)。スミスはミリーの俗世間とは溶け合わない性質に目を向けているが、このミリーの性質は、彼女と一般の人々の間にある見えない境界線を感じさせる。この人と人にある境界線は、一人の人が世間に対して本来の自分を隠すために持つ建前と同様、異なる二つのものの間に横たわっている。ワイルドを読む際には常に意識される建前、あるいは「表面」(surface)は、ジェイムズの作品を読む上でも鍵となることが見える。

こっそりと自分の空間を作り上げるのは、ワイルドの作品では、スフィンクスと呼ばれる女性に限らず、醜い絵を密かに人目の触れない部屋に隠すドリアン・グレイにも当てはまる。ワイルドとジェイムズに共通しているのは、二人が繰り返し表現しようとしている「秘密」は、どちらの作品においても、登場人物が苦心して作り出す、限られた場所の中で守られていることである。

この「秘密」にもう一步踏み込むと、科学的分析からこぼれ落ちる神秘は、

非日常的空間に潜んでいるようであって、日常の中にあると言える。思想的な面から考えると、ワイルドはケルト人として、イギリスの経験主義に反発し、カントやニーチェなどのヨーロッパ大陸の思想に傾倒する傾向があったことを、トーマス・ライトはワイルドの蔵書も調査した上で確認している (Wright 96)。ワイルドはドイツ文学の本をかなり所有し、ドイツ語で読んでいたが、その中でも E.T.A. ホフマンに引かれていたのは、アイルランド民話に親しんでいたワイルドとしては自然であるだろう。ジョン・スローンは、ワイルドの作品に複合的 (multi-dimensional) な要素があるのは、ドイツのフェアリー・テール的であると指摘し、さらにホフマンの作品では善と悪の対立というような問題の解決は、現実の世界ではないところでなされ、ワイルドはこの流れを引き継いでいると見る (Sloan 82)。確かにワイルドの物語では昼とは違う夜の世界で物語が急展開することがあり、「秘密のないスフィンクス」では裕福な人物の日常から外れたロンドンの貧しい街角が重要な場所となる。

しかし、ワイルドの作品の非日常は、別世界と言うほどかけ離れた場所ではないことが特徴である。例えばホフマンの代表作の一つである『くるみ割り人形』 (*Nussknacker und Mausekoenig*, 1816) では、夜になると別世界が出現するが、ドリアン・グレイがさまよう夜の街やスフィンクスと呼ばれる女性の隠れ家は、日常の生活圏のすぐそばにあり、境界線が意識されることに意味がある。余韻は境界線の周りに存在し、たつぷりと現実から離れた場所では消滅してしまう。境界線周辺の場所が生む危うさやスリルは、そこで知人に出会ったら咎められる危険のお陰で成立している。ワイルドの場末や夜は、異世界を作り出すのではなく、同じものの色を変えて見せると言うこともできるだろう。その意味でワイルドの秘密の場所は、遠い場所ではなく、深い場所に存在している。

スティーブン・ドナディオは、ジェイムズの『黄金の杯』 (*The Golden Bowl*, 1904) を理解するのに、道徳的理想は不道徳な手段でなされえると考えるニーチェの考えを持ち出している (Donadio 249)。このドナディオのこの指摘の中で読み取りたいのは、道徳の問題よりも手段と成果のズレである。ワイルドやジェイムズの作品では、しばしば境界線が描かれるとともに、ドナディオの指摘の通り、作中人物の行動が最終的に表現されるものとずれていることが少なくない。そして、悪を描くことで奥に潜む美を表現するというようなズレからも、謎や余韻が生まれてくると言ってよいだろう。

3. 物語の要素としての余韻

ワイルドは他の作家の作品のテーマやストーリーをよく借用したことで知られているが、人から聞いた話をヒントに作品を書くことが多かったジェイムズも、ワイルドに負けず劣らず人のものを取り入れることに躊躇いがなかったと言える。それは、ある意味では、自分の作品と他人の作品、あるいは自分のアイデアと目に付いた題材との間にある隙間を的確に意識していたためだとも考えられる。物語にふくらみを持たせるフィクション性のありかを探る時、科学的分析では全てを消し去ってしまうだけだとしても、物語の中の曖昧さだけでなく、ある物語で用いられる言葉やプロットから湧き出す余韻に目を向けることができる。二人の作家が、ともに外からのアイデアを取り入れることに罪の意識を感じていなかったのは、物語の色艶がそこにあると実証的に指し示すことができない隙間、あるいは余韻も作品のうちと見做していたためだと考えられるのではなからうか。

レディー・アルロイが部屋の中に現われた際の神秘的な様子は、“looking like a moonbeam in grey race” (*The Complete Oscar Wilde* 210) と描かれ、月を取り巻く灰色の雲にたとえられている。ここで描かれるベールのような雲は、まさにこの作品全体を神秘的に仕上げる不可解な余韻と同じものである。

登場人物や事実をとりまく魅惑的な灰色の雲は、ジェイムズも好んで描いたものである。ジェイムズの作品では解釈がいくつも可能である曖昧さはお馴染みのものだが、「友達の友達」では、例えば見たものが幽霊だったのかそうでないのか判断ができない場面では、目撃者を診察した医者への反応は、He gave her a remedy for hysterics, but said to the aunt privately: “Wait and see if something doesn’t happen at home.” (*The Novels and Tales* 326) と表現される。ここでは、医者が気を利かせてダブルスタンダードを持ち込むことで、作品には効率的に非日常的なものの気配が持ち込まれている。

ジェイムズは、レディー・アルロイの灰色のベールに当たるものを、状況のもどかしさが生み出すこともよく心得ている。「友達の友達」では、ともに幽霊を見る能力を持つらしいが面会がどうしても妨げられる二人の状況は、次のように描かれる。

They were in a word alternate and incompatible; they missed each other with an inveteracy that could be explained only by its being precon-

certed. It was however far from preconcerted that it had ended—literally after several years—by disappointing and annoying them. I don't think their curiosity was lively till it had been proved utterly vain. (*The Novels and Tales* 332-33)

ここでは、簡単に会うことができるはずの二人が不自然な偶然のせいで会えないという日常の中のゆがみが、思いがけず不可解なエネルギーを生み出している。ジェイムズは、人や状況にまつわりつく不可解な気配を様々な表現手段で描いてきた。ジェイムズの作品に表れる権力を分析したマーク・セルツァーは、例えば『使者たち』(*The Ambassadors*, 1903)のチャドは、広告を物を物以上にするものだと言っていることに注目し、ストレザーにとってはチャドが若さと自由の広告だと見る (Seltzer 145-145)。ただし、セルツァーはこのようなふくらみに、美的余韻よりは力を見出している。セルツァーは、フーコーの言う力は外部にあるものではなく、内部に存在するものであるため、社会習慣は力を象徴するものではなく、力そのものであり、文学はそれ自体力を持つと考える (Seltzer 153)。この考えは、ジェイムズの作品の中の行動を現実の作用と見做すヒリス・ミラーの考えにも重なる分析であり、作品に現実的な力を与えている。しかし、ジェイムズの、あるいはワイルドの作品の余韻は全て作品の外の方に置き換えられないところに意味がある。

チャドが広告から感じ取る商品の価値以上の印象やストレザーがチャドに感じる若さへの憧れでは説明し切れない複雑な感覚は、いわば余韻だが、作品内で描かれるものが現実の世界にあるものの象徴だと割り切ることを避けるならば、作品の中の余韻が作品の外に流出してしまうのを止めることができる。実のところ、作品の力のうち、外の世界では実在しないように見えるこの余韻の部分が、作品に独特の力を与えている。作品の中では、ある言葉があるものをきっちり指すという対応関係で割り切れないことこそが、作品を保護し、豊かさを温存している。

4. 音楽的コミュニケーション

シュライエルマッハーは、一般に言語の限界を示した思想家として知られるが、アンドリュー・ボウイは、シュライエルマッハーを再評価しようとする試みの中で、シュライエルマッハーが言葉に依存しない音楽的コミュニ

ケーション (musical communication) に注意を払っていたことに注目している。ボウイは、芸術作品の創作の際には、創作のための法則を利用するが、その利用の仕方は多様であるとシュライエルマッハーが考えていた点に豊かさのある緩みを発見している (Bowie 218)。この作品創作上の緩みは、出来上がった作品の余韻と似る。

ペイターが音楽を内容と形式が一致した理想形と考えたことはよく知られているが、伝達の観点から見ると、音楽の内容と形式の間には、余韻も含まれているだろう。ボウイは、言語と音楽を繋ぐのは比喩の考え方だと適切に指摘しているが (Bowie 209)、文学作品は、とりわけ比喩と深く関わるものである。そしてワイルドやジェイムズが描こうとしている余韻は、言葉の合理的な機能に依存しきっていないという意味で、ことさら音楽よりの性質を持つ。

ともに極度のスタイリストであったワイルドもジェイムズも、当然、形式にこだわりを見せていたが、二人が目をつけていたのは、余韻を生み出すスタイルでもあったと言えるだろう。あるいは、ワイルドとジェイムズにとって、形式は、余韻に昇華されるべきものであったと言えるのではなかろうか。

余韻は、決定不可能性とは、少なくとも比重のかかっている部分が違うという意味で異なる。二人の作家の作品中の謎が謎として残る時、そもそも揺るぎない事実は存在しえず、判断というものは根本的に成り立たないと主張されているわけではない。レディー・アルロイが場末の部屋で本当に何もしていなかったのかどうかは、事実が描写されないだけで、事実がないわけではない。答えは存在しているが、必要がないため見せられないということもできる。そのため、彼女が秘密の部屋で大したことはしていないとしても何を感じ、その部屋を借りさせるほど彼女を「秘密」というものに引きつけたものが何であるのかは、依然、不鮮明さの中にある。ミステリー好きだと語り手が断定するレディー・アルロイが魅惑されたのは、特定の秘密ではなく、より大きく漠然とした「秘密」や「神秘」そのものだと考えられる。これは判断不可能という判断を読者に押し付けているのではなく、読者をレディー・アルロイの「もや」の中に取り込もうとしていると見るべきだろう。「秘密のないスフィンクス」は、この「もや」の美しさを見せるための作品だと言うこともできる。

二人の作家は、人間の判断の限界ではなく、見えにくい余韻の存在を間接的に描いている。この余韻は、ゴシックの恐怖は不可解なものが見えること

にあるのではなく、相手が見えないために生じ、その存在は気配によって示されるのと同じように、遠まわしに示されている。そして、二人に共通するのは、「秘密」が漠然と魅力的なだけでなく、育ちのいいレディー・アルロイに思い切って場末の部屋を借りさせ、「友達の友達」や「密林の獣」の主人公達の生活が秘密を中心に回る生活になってしまったように、現実的な影響力を秘めていることを描いている点である。

「秘密のないスフィンクス」や「友達の友達」は、科学的分析が小説をどの程度破壊できるのか、あるいは味気ないものにできるのかという問題に関わっている。しかし、これらの作品には登場人物の想像は含まれているとはいえ、非現実的な設定は一切ない。二つの作品に登場するのは奇妙な人達ではなく、客観的に見て常識人であり、物語にも無理な展開はない。つまり、少なくともリアリズムと余韻は両立している。分析が切り込んでいけるのは、言葉で表現された作品の内容の部分だけであり、余韻には手をつけることができない。しかし、余韻は、決して現実離れしたものではない。

同じ言葉でも使う人間の過去の体験により意味は異なるというシュライエルマッハーの基本的な考え方を逆方向に広げていくと、それでも共通感覚は存在するという前提にぶつかり、この感覚は二人の作家の扱う余韻へと繋げて考えることができる。レディー・アルロイが「謎」というものに引きつけられたのは、謎が持つ神秘性に惹かれたためだけではなく、謎は自分を人の目にとって魅惑的にすることを意識していたため、つまり謎に対する人の共通感覚を漠然と感じていた部分があったためであろう。ジェームズの描く謎や秘密の場合は、それを作中人物が突き詰めると、謎の中にはある種の理想的な人間関係が含まれていることが「密林の獣」や「使者の祭壇」など複数の作品に示されている。そう考えると、謎は、理解できないものとしてあるのではなく、手が届かないが、存在することにより人に何かを伝えるものであると取ることができる。

分析家ではないワイルドやジェームズが行なったのは、科学的分析、あるいは言葉の指し示す範囲から逸脱するものがあると示す分析ではないだろう。美意識の強い作家が試みたのは、「余韻」を合理的に分析することではなく、それがいかに強烈なものとなりえるのかを作品を通して体験させることである。「余韻」が言葉による説明を退ける性質のものなら、それがあると知るための手段は、体験のみである。気質的には対照的なワイルドとジェームズは、このような余韻を味わうことを重視した点では、非常に近い存在であると言える。

引証資料

- Bell, Millicent. *Meaning in Henry James*. Cambridge, MA and London, England: Harvard UP, 1993.
- Bowie, Andrew. *Aesthetics and Subjectivity: From Kant to Nietzsche*. Manchester and New York: Manchester UP, 1990.
- Brown, Julia Prewitt. *Cosmopolitan Criticism: Oscar Wilde's Philosophy of Art*. Charlottesville and London: The UP of Virginia, 1997.
- Cutting, Andrew. *Death in Henry James*. New York: Palgrave Macmillan, 2005.
- Donadio, Stephen. *Nietzsche, Henry James and the Artistic Will*. New York: Oxford UP, 1978.
- Freedman, Jonathan. *Profession of Taste: Henry James, British Aestheticism and Commodity Culture*. Stanford: Stanford UP, 1990.
- Hoffmann, E.T.A., Nussknacker und Mauskoenig. *Univeral-Bibliothek Nr.1400*. Stuttgart: Reclam, 1993.
- James, Henry. *The Novels and Tales of Henry James*. New York: Charles Scribner's Sons. Vol.17, 1909.
- Miller, J. Hillis. *Literature as Conduct*. New York: Fordham UP, 2005.
- Seltzer, Mark. *Henry James and the Art of Power*. London: Cornell UP, 1984.
- Sloan, John. *Oscar Wilde*. Oxford and New York: Oxford UP, 2003.
- Smith, Llewellyn Virginia. *Henry James and the Real Thing*. London: Macmillan, 1994.
- Wright, Thomas. *Built of Books: How Reading Defined the Life of Oscar Wilde*. New York: Henry Holt and Co., 2008.
- Wilde, Oscar. *The Complete Oscar Wilde*. New York and Avenel: Crescent Books, 1995.

Synopsis

The Sphinx without a Secrete Written by Two Authors

KAWAGUCHI Toshiko

In spite of the rivalry and dislike between Oscar Wilde and Henry James, they seem to have taken some hints from each other's stories. But what is more important is the similarity in their basic strategy of storytelling. Wilde liked to create many mysterious people, and "The Sphinx Without a Secret" is a story that features aesthetic mystery. And Henry James's "The Friends of Friends" can be placed beside this short story of Wilde's when we think of the mysteriousness that is crucial to their writing style. In these stories delicate nuances and images that

lie between the lines come more into focus than plots or characters. When the two authors are placed side by side, their well-known ambiguity or playfulness takes a clearer shape as a writing style.